

紹介をいただきました、松川町町長の深津でございます。皆さん方、この4月よりそれぞれの地方自治体に就職されましたフレッシュな方ばかりでございます。今日はその研修ということで、多くの皆さんのご出席、大変にご苦労さまでございます。私は松川町の町長を務めておりますけれども、今日は皆さんの前で講話ということでお話をしてまいります。しかしながら、私自身が、公務員の出身ではありませんし、学者でもありませんし、大学の教授でもございません。「公務員たるもの、どうあるべき」、そのようなお話をここでするような器でもないと思っております。私は自分自身が、町のかじ取り役として、町長として、どのような考えで日ごろおるか、それから、職員に対してどのように物を言っているか、そのようなこととお話しさせてもらいたいと思っております。そうした話の中で、また皆様たちにとって一つでも二つでも参考になること、理事者としてそのような考えを持って行政運営をしているのだということが少しでも参考になればまた幸いだと思っております。そのようなつもりでお話を聞いてもらいたいと思っております。さて、何かからお話しして……

レジュメをごくごく簡単に皆様のお手元にも配布してございます。

まずは私自身ですけれども、私は商店街のお店の主人でございます。町長になりましたのは平成23年でございます。2期のちょうど2年が過ぎたところでございます。その前は町会議員をやっておりました。2期の半ばで町長選に出馬したわけですがけれども、6年間、町会議員をやっておりました。そうした議員活動を通じる中で、町政を見ながらおりました、自分の考えを固めた中で町長に就任したわけでございます。その町会議員になる前でございますけれども、私も大学を出まして東京にしばらくおりました、30少し前にこちらに帰ってきて、自分の商業を継いだということでございます。町議になる前にはさまざまな役職も務めました。消防団長をやったり、あるいは中学校のPTA会長をやったり、商店街の会長をやったり、商工会の副会長もやっておりました、議員になりました。

ここに自分の生い立ち、経験が、商業・商店街と書いてありますけれども、商店街の会長を務める中で、いかにお客様たちに商店街に足を運んでもらうか、そして、来てくれたお客様たちにどう楽しんでもらうか、そのようなことばかり、実はやっておりました。ですから、いろいろなお祭りをしたり、イベントをしたり、売り出しをしたり、そして、どのようなことをすればお客様たちに喜んでもらえるか。本当にその一心でした。それが当然のことながら、自分の商売であるお店に多くの人たちに来てもらって売り上げをアップしていく、最終的にはそこに行き着くところではありますけれども、商店街の中で、どのようにすれば来てくれるのだろう。今から、そうですね、30年、40年前になってまいりますので、その当時はまだまだ高度成長期の時代でしたので、やればやっただけのまた成果が少し出てくるというような時代でございました。

商店街の会長のときに、役員会などでこのようなことを言いました。商店街、あるいは商工会としてできることは、個店の売り上げを伸ばすことはなかなか難しい。けれども、

そこにありますように、人の集まる機会、チャンスは作ることができる。それから、集う雰囲気、例えば商店街にベンチを置いたり、花を植えたり、楽しくなる雰囲気を作るとは会である。それから、集う場所。空き店舗対策をやったり、いろいろな、来てくれた人に休んでもらう場所、ベンチや、先ほど言ったミニ公園的なものを作ったり、そのようなことはできる。けれども、そこに集まってきてくれた人たちをどのように自分たちのお店に結びつけていくかは皆さんの努力だと。そのようなことを言ったことを覚えております。そうした町民の皆さん、住民の皆さんに喜んでもらうにはどうすればいいか。どうすれば来てくれるのだろう。ずっとそのようなことを、本当にそれは一生懸命やりました。

そうした中で私は、町会議員の途中からだったかな、商工会の副会長をやった。商店街の会長をやりながら、そのようなものになりました。6年間の町議会議員の中で、行政を見ておりました。行政とはどうあるべきか。役場とはどうあるべきか。ややもしますと、皆さんもお聞きすると思うけれども、お役人やお役所という言葉、これは住民の皆様から、ある意味では、やゆされている。お役人体質などという言葉時々使われますね。そのような中で、そうしたものを打破して、行政、あるいは役場というものが本当に町民目線、町民の皆さんと同じ目線の中で物事をやっていくということがそれぞれの町村の発展につながっていくと考えておりました。これはそれぞれの町村の、また町村長の考え方、いろいろなものがありますので、一律には言えない。けれども、私が今日ここで話すことは、ともすれば私個人の考え方かもしれませんが、そうした中で皆さんの、少しでもお役に立てればという思いでございますので、了承をいただきたいと思いますが、私は町長に最初になるときに、こう思いました。松川町に住んでよかったと、まずはその地域に住んでいる皆さんたちが実感できる地域づくりをすることだと。非常に大きな目標ですけれども、そのような目標を立てました。そのときに松川町、皆さんのところにも総合計画がございますけれども、第4次、あるいは第5次。第6次まで行っているところはないかと思っておりますけれども、今、4次、5次ぐらいのところだと思いますが、当時は第4次の「人の和のある」、そこに書いてあります、「地域協働の町」、これが松川町としての第4次総合計画でございます。

今、皆さんご承知だと思いますけれども、日本全国、協働のまちづくり。協働。住民の皆さんとともにまちをつくっていくのだ。これはある意味では当たり前のことではあるのですけれども、今、日本全国でそのような、言葉は違っても、住民の皆さんと一緒に行政が地域をつくっていくと言います。では、それはどのようなことなのだ。協働の町、住民の皆さんと行政と一緒に地域をつくっていく。では、何をすればいいのだ。協働、これは素晴らしい言葉である。また、ある意味では今の時代の中で行政が一番大切にしていかななくてはならないこと。行政のみで物事ができるわけではない。住民の皆さん、どう思いますか。自分で考えてみてください。今日、住民の皆さんと一緒に地域をつくっていく。では、何をやるのだ。そのときに、私もこれは議員時代から考えた。考えに考える。私は時の町長に対しても質問した。協働のまちづくり、住民の皆さんと一緒につくってい

く。すばらしいことだ。では、何をしていくのですかと。ずっとそれを考えていたときに出てきた、自分としての考えが、この三つの言葉です。情報の共有、コミュニケーション、現場重視、この三つを励行することが、協働の地域づくりにつながっていくのではないかと。これは本当に、先ほども申したように、いろいろな考え方があると思いますけれども、私は考えました。地元に住んでよかったと実感できるまちづくりを進めるために、その下に、この三つの言葉を実は柱にして町長になりました。情報の共有、コミュニケーション、現場重視ということで私は町長になりました。そして、この三つの柱につきましても、やはり自分の商業時代、あるいは議員時代、さまざまな経験を積む中での、出てきた言葉でございます。これは今も大切にしております。今は非常にITの時代でございます、パソコン、メール、さまざまなIT機器の中で情報が氾濫しているわけでございます。

一つ、わかりやすい例をお話いたします。これは町長になってからの経験談でございますけれども、皆さん方はまだ1カ月余りということで、まだまだ、そのような場面はないかと思っておりますけれども、役場にとって、住民の皆さんとのもめごと、こびりついてしまっている、住民の皆さんに「何を町は考えとるんだ。冗談じゃない」というような案件は、どこの町村にも必ずあると思っております。私も一つの経験を話しますと、町長室へ課長と係長が「町長、実はこういうことで住民の方ともめている」と。もめているというよりも、もう最終段階で、電話をしてもそっぽを向かれてしまうと、このような案件を相談に来るわけです。私はすぐに「いいか。電話やメールやファクスはだめだ。現場へ行け」と。現場とは、その人のおうち。そして、顔と顔を合わせて、目と目を合わせて説明しろと。まずは説明、どのようなことでもめているのだと聞くわけです。聞くと、行政の方が実は合っているのです。間違っていない、説明していることは。住民の皆さんの方が通らないことを言ってきている。このようなことも、これから皆さんはものすごく経験すると思っております。そのときに、もちろん窓口で恐らく説明したでしょう。その後、電話でも説明している。合っている。そのときに「いいか。わかった。それじゃあ、担当者と課長、必ずついて、そのうちへ行ってこい。それで、顔と顔を合わせてきちんと説明しろ。ついては、町としては、どうしても行政としてはそのことはできないんだということをきちんと説明して来い」。

それから、「すぐ行け」と言います。これは大事なことです、皆さん。ちょっといろいろあるので、明日、あるいは2、3日後、これはだめだと。「すぐ行け。今日じゅうに行ってこい」。それで行ってくる。報告に来ました。「どうだった」、課長が「わかってくれました」と言うわけです。そのときに私はすぐ言うわけ。「いいか、課長。何でわかってくれたか」と。まさに責任者も上司も一緒に出向いて、そこできちんと、目と目を合わせて話をしたことが、わかってくれたんだ」と。これはこれから皆さんも大事にしてもらいたいと思っております。それがコミュニケーションであり、まさに現場なのです。それから、そのときにも言いました。「いいか。正しいことでも、物の言い方、言葉遣い、態度で、わかってもらえるか、わからないか、ものすごい差があるんだ」と。同じできないことでも、「できませ

ん」で済ませるのか、あるいは、説明して「申しわけないけれども、その点については行政としてはできないんだ」と、言葉一つで、ものすごい差が出てきます。それは自分の今までの、私は商業ですので、自分のお店にお客様が来てくれなければ、自分の給料は払えない。地域みんなにお世話にならなければ、私の家族は生活ができない。公務員は「生意気だな。あの人、態度悪いな」と言われても、じっとしていれば、皆さんたちは決まった給料が入ってくる。これは民間と公務員の大きな違いです。ただ、皆さん方の生活ができるのも、住民の皆さんの税金をいただくことで初めて皆さんの給料が払われる。これは、そればかり考えて、かたくなになるということは私は申し上げませんが、民間との大きな違い。だから、そこでどれだけお客様目線で接したかということで、かなり違ってくる。これは皆さん方のこれからのさまざまな仕事の中でも生かして行ってほしいと思うところでございます。

それで、私が町長になって、何をしたかということも、若干お話もしてまいりたいと思いますけれども、私の町は、私が町長になりましてから朝礼を始めました、全職員で。町長は月曜日をあけておいてくれということで、最初はずっと私が毎朝、自分の考えを言って、今は職員全員が交代で3分間スピーチということで、8時20分から朝礼をします。ですから、ランダムに担当課が日程を組んでおりますので。ただ、人の前で話すことが苦手な人、私も「町長、私、そんな話せん」という声も聞きました。いい。何でもいいから、話をして。だから、家族のこと、遊びに行ってきたことを文章に書いてきて読む人。何でもいい。大事だからということで、今はそのようにしています。それから、今度は聞く方の身。別に、直立不動して聞くわけではない。みんな、私のところはたまたまワンフロアですので、全員が起立して話を聞きます。やはり人の話を聞くのも大事なことです。そのようなことでやっております。

私が一番、職員の皆さんに最初に望んだこと、これが今まで、今も話してまいりましたけれども、役場へ見える人はお客様だと思えということやをずっと言い続けている。お客様なのだ。それで、気持ちよく役場から帰っていただく。それでまた役場へ来る。役場の大きさも大小ありますので、非常に対応が難しいかと思えますけれども、まずはお客様。公務員にとりましては非常に厳しかったかもしれない。とにかく頭を下げてくれと。とにかく挨拶してくれ。言い続けています。

だから、私は、先ほどの、自分がそのような経験をしておりますので、例えば、松川町の役場の入り口は、花の好きなグループの人たちに頼んで、花を飾ってもらった。これもそれぞれの町村の考え方ですので、一概には言えないのですけれども、庁舎内にPOP、いろいろな、これから話していきますけれども、「報連相」「住みよい町をつくりましょう」。それは全くお店と同じなのです。自分たちがどう考え、どのような町を目指しているのだと、これから住民の皆さんたちにそれを知ってもらっていく。だから、たくさん目標を書いたりしている。それから、カウンターの上の何々課と書いてある裏側には、その課の目指す目標が書いて貼ってある。今年1年は「笑顔で接しましょう」。裏に、職員に見えるよ

うに貼ってある。そのようなちょっとしたこと、これが私の考えている、民間感覚を少しでも行政の中に取り入れる中でやっていきたいという、私自身の思いです。そのようなものをみんながまさに情報の共有。職員も含め、住民の皆さんも。だから、住民の皆さんが来て、課に用事が来る。そうすると、その奥にはいろいろ貼ってある。「住みよい町をつくりましょう」。今は第5次の総合計画なので、総合計画の目標が書いて貼ってあったりする。そのような小さな配慮。皆さんたちが役場に行ってもどのような、例えばカウンターへ行った。そうしたら、ここに花がちょっと飾ってあった。そのような気配り、そのような職場をやはり目指していくべきだと思っております。

次に、初登庁の町長の訓示がここに四つ書いてあります。これは私の言ったことですがけれども、やはり行政職員としてプロ意識を自覚すること。別にふんぞり返れということではないのですけれども、誇りと自覚を持つことが自己研さんにつながると考えます。だから、自分たちは、目指す方はみんな一緒です。住民の皆さんのために、地域のために、これは外せない一番根底にある。それを担っていくのだという誇りと自覚を、プロ意識を持ってもらいたいということを言いました。それから、入り口はやはり挨拶です。挨拶は大事です。とにかく挨拶です。職場の中で、皆さんの配属された課の中でも挨拶。それがコミュニケーションの入り口だと考えるのです。挨拶は非常に大事。

それから、問題意識を持ってくれということも言いました。それはやはり、いろいろな事業やイベントを皆さんは担当していきます。それから事務職で担当していくかもしれない。これでいいのかな、もっといい方法はないのかなということ、常に問題意識を持っていれば、一つのことをやったときに、来年はもう少しこのところを工夫してみたらどうかと。できる、できないではなくて、できることはないか。非常に意識として大事なことは、先ほども申しました。住民の皆さんから、いろいろ言われます。できないことの方が多いかもしれない。できないことを相談されたときに、「できない」ではなくて、できる方法はないか。何か、違う課などに行って相談を受けてみたらどうかなど。常にやはり問題意識を持ってもらいたい。

それから、最後のこれも非常に大事です。報連相。報告、連絡、相談。これも私の一つの大きな柱でありまして、町長になりまして、これを置いた。だから、今までもあったのかもしれませんが、私は報連相や、あるいは「四半期」という言葉も私が非常に今使います。第1四半期、第2四半期、第3四半期、第4四半期、その四半期ごとに、今年1年立てた目標に対してどう進んで、PDCA。だから、PDCA、報連相、四半期、このあたりの言葉は民間企業では当たり前。徹底的にそれをやるわけです。今の三つのことを。そのあたりが、次の行政の意識、発想の転換につながっていくと思っております。皆さん方はまだ2カ月足らずですので、なかなか理解に苦しむところもあろうかと思えますけれども、行政の意識、発想の転換を図っていきたいというのは、私の一つの大きな目標であったわけでありまして、今言うような言葉、これを行政の中にも取り入れていきたいということでやってきております。

また、次の「地域の宝、地財の再発見、再認識」という言葉ですけれども、これも私の、町長になるときの大きな柱でございました。今、皆さん方は伊那谷、諏訪から南の南信3郡の皆さんたちです。皆さんたちもこれから自分たちの町や村や市や、そのような地域の宝は何なのか。地財の再発見。存外、自分たちが住んでいると、忘れがちですけれども、そのようなものを見直し、そして、いかに発信して、これからこの伊那谷は三遠南信、あるいはリニア新幹線という時代を迎えていきます。いかにこの地域の地域らしさ、宝をどう発信していくかということが非常に大切になるのではないかなと思っております。この伊那谷、南信は、長野県は非常に移住・定住をしてみたい、あるいは観光地として行ってみたいというところの、本当に全国でもトップクラスの人気を誇る県です。しかし、残念ながら、南信ということになると、今までの交通事情や、あるいは観光地としての全国的に知れ渡るような、善光寺であったり、軽井沢であったり、そうしたネームバリューは若干まだ乏しい一面があります。だから、今度は逆に、地形などいろいろなものを嘆いても仕方ない。そうしたものをいかに連携していくかということが、私は大事になると。それぞれの市町村は、キャパシティの問題、あるいは、観光地としてのネームバリュー、ブランド、そのようなものについてはまだまだ課題は多い。そうした課題を克服するのは、いかに連携していくか。そうして、ここにありますが、この町でなければ、この村でなければ、通りすがりの町や村にならないこと、これが非常に大事だなと思ってます。

裏に、サービス業という言葉があります。これは、私が今まで話してきた、行政というのはいろいろな考えがあるので、それだけではない。けれども、一つの考え方として、役場というものは、ある意味ではその地域で一番大きなサービス業だ。住民サービス。それで、このような考え方、いいですか、住民の皆さんは税という形でお金を払ってくれているのです。税をいただく。そして、その対価としてさまざまな住民サービスがある。だから、ある意味ではサービス業である。先ほど言いました、役場に来てくれる皆さんたちはお客様なのだ。だから、徹底してお客様感覚を持たなくてはならない。残念ながら、行政には売上げがない。これが企業であったり、お店であったりすれば、売上げが、例えば落ちてくる。そうすると、さあ、どうする。仕入れやいろいろ工夫して、付加価値の高いものを販売したり、いろいろ。売上げがない。では、行政にとって売上げとは何だ。それが住民満足度。先ほどから言っている、この地域に住んでよかったなど、こう思ってくれるのが、ある意味では、今度は民間で言う売上高である。では、その住民満足度はどのような数字で出てくるか。これが非常に行政にとって難しいところです。住民の皆さんたちが、ああ、この町でよかった、この村でよかった、この市に住んでよかったと思えるのが住民満足度。これを推し量っていくのがなかなか行政には難しい。数字でぴしゃっと毎年出てくるわけではない。だから、これが、住民アンケートであったり、あるいは今度は皆さんたちがいろいろな場面で、市町村にはいろいろな会議があったり、地域のイベントもあったり、どれだけ地域の皆さんたちと接する中でいろいろ出てくるか。

それで、私自身ですけれども、地域の会議やいろいろな審議会、委員会、それから地域

の会合があります。自治会ごとのまちづくり懇談会というようなものもあります。これは私の考えで、非常にそのようなところへ出席します。住民の皆さんと、町は今このような事業、それは担当課からいろいろ説明したり、職員が説明してくれる。その他、意見交換。それで、地域の皆さんたちから、「何でもいいですよ。町長も出席しているので、言ってください」、もちろん「ここの側溝、前から言ってるけど、町はちょっともやってくれん」。いくらでもあります。町や村へもう何年も前から言っているけれども。ただ、私はそこで「皆さんから、どんな意見、ささいなことでもいいです。どんなことでも言ってください。全ては行政ができるとは言えません。ただ、住民の皆さんがどういうことに悩み、どういうことを町に言いたくて生活をしているかということを知ることが、私にとっては大きな財産です」ということをよく言うのですけれども、非常にそのように住民の皆さんと接します。

ですから、皆さんたちもいろいろな、地域の祭りもあろうし、イベントもあろうし、会議もあろうかと。できるだけ住民の皆さんと接すること。そうして、その中から、住んでいる皆さんがこう思っているのだと。だから、私は出席するのです。そうすると、高齢者の方から「町長、この間、役場へ入って行ったら、すぐ受付の人が出てきて、何をするかちょっと迷ったら、声をかけてくれた。案内してくれた。窓口のみんなが明るく挨拶してくれた。町長、本当明るくなった」このように聞きます。私自身にとっては、非常にうれしいことだ。今度は逆のことももちろんあります。「町長、まず行ったら、つっけんどんでこうだった」。それらの意見をまた朝礼や、あるいは職員直接に対して「喜んでくれたぞ。ぜひともこれを続けていってほしい」というようなことを、声をかけたりしてやってきた。売り上げとはそのように考えております。

それから、先ほど来言っているP D C Aや四半期、報連相など、本当にもう企業にとっては当たり前のことですが、これを言う。これは、議員時代も見ておる。皆さん方は非常に優秀ですし、今の役場の皆さん方の上司など、非常に一生懸命、地域のためと思って、やってくれております。ただ、行政が若干欠けるなど思っていることは、これはずっと議員時代からも見ていてわかる。計画を立て実行していくことは非常に得意です。すばらしい能力も、みんな職員は持っていますし。ただ、その出た結果をチェックして次にどう生かしていくかということについては、ややもすると行政は苦手な部分がある。このようなことのために計画し、実行しました、だから、今度は住民の皆さん、あるいは議会の皆さんから、こうやると。「これをやりました」、やりましたではなくて、もう1歩進んで、やりました。「こういう結果なんで、次にはこういうことに生かしていきたい」。例えばの話を上げますと、健康や福祉や介護など、いろいろある。健康集会、これはみんな住民の皆さんが大勢集まって健康に取り組んでいこうということで、非常に大事です。役場の2階の大会議室に大勢集まって、やりました。そうすると、今度は行政サイドとしては、このようなことで大勢の人が集まってくれて、いい意見が出ました。それはそれで、とても大事なこと。ただ、例えば100人が出てくれました。その100人の人たちがその後、

結果として、このような健診を受けてくれた人が何%ぐらいいたと。そのために今度は、保健福祉課としては、その結果がこのように出ております、次にやはり今度は違う、そのようなものに余り関心のない人たちに声をかけて、このようにして次はやっていきたいと思う、というところまでというのはなかなか難しいわけです。大勢集まってくれました、よかったです、いい意見も出ます。それはすばらしいのだけれども、次のアクションに生かしていくということが大事なのではないかなと思っております。

それから、これは自分の町のことですけれども、昨年、第5次の総合計画がスタートして、今度は「いっしょに育てよう 一人ひとりが輝く 笑顔あふれるまち まつかわ」を目指していくということで決定になりました。これは26年、27年、2年間かけて住民の皆さんのアンケート、ヒアリング、それからワークショップで住民の皆さんたちから集めて、やってきたわけで、それぞれの市町村にはそれぞれの総合計画、それぞれの自治体の目指す将来像があると思う。それが一番の柱です。それと市町村長の皆さんとの考えの整合を図りながら事業を推進していく。いろいろ1年間、予算を立てて、計画を立てていきます。それらの事業は、全てはやはり皆さん方の持っている総合計画に通じていっているのだということを理解して考えていくことが大切だと思います。だから、例えば29年度に新しい事業を一つ計画を立てた。その計画が、町村の総合計画に連携して、目指すそれぞれの自治体の姿のためにこの事業をやるのだという物の考え方、発想、それをしっかりやっていくことが大事だと思っております。

それから、これからの自治体ということで幾つかしております。広瀬淡窓、儒学者ですけれども、これは私の一つの、座右の銘ではありませんけれども、「君は川流を汲め、我は薪を拾わん」。続きがもちろんあるわけですが、「あなたは川へ行って水をくんでください。私は薪を集めます」。お互いに協力し合って、やっていく。実はこの詩は、今から50年近く前になります。私は東京にいたときに学生寮におりまして、学生寮の食堂に実はかかっておった言葉です。そのころは共同生活ですので、お互いが助け合ってやっていくということを書いた、広瀬淡窓は江戸末期、明治の初期の、大分県出身の儒学者ですけれども、これが大きくかっている。その当時、何にも偉い考え……。今になって考えてみますと、やはり協働の町づくりです。自助、共助、公助とありますけれども、行政だけではない。お互いが一緒になって地域づくりのためにやっていく。この言葉は、私は非常に好きです。町長室にも、色紙に書いてもらって、貼ってあります。

それから、先ほどのリニア、三遠南信、これから大きく、時代が変わっていきます。そのような中であって、人口減少、少子高齢化の時代の中であります。今、南信でも南箕輪村さんのみ人口が増えているのですけれども、また、つい先日も村長さんと一緒に話しましたが、一気にふえるのもなかなか難しいなと笑っておりましたけれども、私たちから見れば、うらやましいなと思うのですけれども、人口はどうしても、どのようなデータを見ても、ここしばらくは減ってきます。では、人口が減ってくることが悪なのかという考え方。今度は逆転の発想。日本全国には本当に人口が少ない町村もあります。減って



いく町村も。では、そこに住んでいる皆さんが不幸か。決してそうではない。やはり人口は減っても、先ほども住民満足度と言いましたけれども、地域に住んでいる皆さんが生き生きして生活ができる。そのような町や村をつかっていくにはどうすればいいかということを考えていかななくてはならないのだと思っております。人口が少ない村は不幸か。不幸などではない。だから、そのような町や村をつくるにはどうすればいいのだ。これはまた皆さんも考えていってもらいたいなと思っております。

それから、自助、共助、公助、これも非常に言われます。実は平成23年の4月の末に私は町長になりました。23年には3月11日の東北大震災があった。先ほど朝礼を始めましたと言いましたけれども、朝礼を始めて最初に言ったことは何だと思えますか。職員の皆さんに、全員靴にしてくれと言ったのです。当時は、夏あたりは突っかけ、スリッパ。当然、靴は置いてあって、事務で座るときにスリッパや突っかけ。私も町会議員のときには、2階に上がっていくと議員の下駄箱があって、革靴を脱いで、当時は突っかけを履いたりしていろいろおりました。23年の大震災を受けて、そうして、ぜひ、どのような靴でもいい、スニーカーでも。私は町長室に行きますと、すぐスニーカーに履きかえます。お客様が見えたりするときには履きかえたりするときもありますけれども、よほどスニーカーの方が、動きがいいです、飛んで歩くときに。だから、靴にしてくれと。今は全員靴です。それと、やはり突っかけやスリッパ等でべたべた、べたべた。お客様が見えるのに突っかけはないだろうという頭も実はありました。それは少し考え方が違うのではないかという思いもあります。そのような、災害ということで、自助、自分で助ける。自助、共助、公助。これはもう、皆さん方の市町村もそうですけれども、いざ災害が起きたときに、まずは自分のうち。そして近所をどうするのだ。そして公助。役場が、行政がどのように動くか。これは非常に大切なことです。今、大きな災害がいつ起こるかわからないという時代なので、特に大事なことではないか。住民の皆さんがどのようにして、そうした大災害が起きたときに、行政だけでは無理ですよ。自分たちの地域は自分たちで守っていくということも考えていってください。自分の身は自分で守る。これは大事なことだと思っております。

それから、今、人口減少があります。それから今度は、自分のところを申しますと、人口微減です。0.6%ぐらい減っている。ところが、世帯数は減っていない。それではどのようなことかという、1世帯の今度は核家族化が進んでいるということで、これは、人口の減っている町村においては似たようなところはあるかと思えます。では、核家族化が進むとどのようになるか。これは、今度はコミュニティーの欠如。一番心配なことは、コミュニティーの欠如です。今、地域ということで、皆さんのところもそうだと思いますけれども、雪が降ったら、地域の皆さんが子供たちの通学の雪かきをしたり、あるいは小さい河川の掃除をしたり。それから、道路もそうです。PTAや保護者会など、皆さんこれからいろいろなコミュニティー。あるいは、住まいの自治会など。そのようなものに出けなくなる。子供を育てなくてはならないし。そのようなことが、どうしてもこうした地

方では、地域コミュニティーがあって初めて、みんなが一緒になって地域づくりが進みます。そのようなものが非常に厳しくなってくるということを非常に心配します。

それから、リニア、三遠南信、先ほども言いました。私の町にも、山の中にも、今は外したかな。ずっと貼ってありました。「また来てね」「また来るよ」。先ほど来申し上げました、今この地域には、全国に響き渡るような観光地があって、人が訪れてくれるということは、非常に厳しい。そうした中で、いかに自分たちの市町村の、ファンを作っていくか、リピーターになってくれるか。私は商業出身です。一番PRで効果があるものは、実は口コミです。それはインターネット、SNS、いろいろあります。それも非常に速いのですが、口コミの力は非常に大きいです。だから、リピーターをどのようにふやしていくか。その地域のファンをどのようにして作っていくかということが大事だと思っております。私の大きな柱、交流人口をふやしていきたいということは、町長になったときからの一番の目標です。だから、とにかく動くこと。人が動くことで、経済が動き、物が動き、情報が動く。だから、これは皆さんの地域の、例えば地域の近くの神社のお祭りでもそうです。とにかく人が動くこと。少しでも動くこと。動くことが、金、物、情報が動くことになる。だから、ファンも作ってくれる。そうした中で大事なことは、「また来てね」「また来るよ」、その関係を、地道ではありますけれども、1人、2人、つくっていくこと。地域全体がそうした気持ちでしていくことが大事だと思っております。

あと、まさにここに、リオオリンピックの400メートル、日本の4人組のリレーの銀メダルのことが書いてありますけれども、皆さん、承知かと思えますけれども、4人で走る400メートル。100メートルずつ走る。日本の選手の1人ずつの100メートルの記録は、足すと6位だそうです。けれども、あれはバトンタッチの技術で銀メダルが取れている。まさに4人の協力した力です。これは一つの例ですけれども、非常にいい例です。それから、成功は能力ではなく性格だと。やはり最後は人間です。人間関係が大事です。だから、先ほど言った挨拶やコミュニケーションなど、いろいろなことを言っていますけれども、最後はやはり人間。これはぜひとも、そのようなことも頭の隅へ入れておいてください。

それから、行政、私たちもそうですけれども、皆さん方はまだ1カ月ですけれども、若い人たちの力、考え、これは非常に大事です。皆さんたちの職場においてもそうですけれども、皆さん若い人たちの、職員の皆さんの提案などがスムーズに上がってくる職場を作っていくかなくてはいけない。どうしても行政というのは、係長、課長、そのようになってきますと、今度は予算の問題や、あるいは理事者から、そのようなことを言えば怒られるのではないかなど、いろいろな思いがあってくる。そうすると、だんだん、だんだん硬化していってしまう。そのようなことを言えば、町長に怒られるのではないか。そのような職場は打破していかなければ。そのような職場をつくってほしいなと思っております。

最後に、「本降りになって出ていく雨宿り」という川柳があります。これはおもしろい川柳だなと思って、これも何年か前に見て、ずっと頭から離れない。雨が降ってきたと。雨

宿りしようと思って、軒先へ避難した。それでずっと、やむかなと思っているうちに、どんどん本降りになってきた。最終的には、本降りになって、びしょ濡れになって出ていく雨宿り。これは皮肉ってあるわけです。これはどのようなことかという、やはり判断のスピード性。行政は非常に手間がかかります。いろいろな手順を組む。手間を省けるもの、スピード性は住民の皆さんからも要望されますし、当然のことながら、民間感覚でいけば、スピーディーな物の動き。そのあたりは、この川柳も非常におもしろいです。「待てよ、じっと。もうちょっと慎重に。もうちょっと慎重に」と言っているうちに、できなくなってしまう。これも非常におもしろい川柳ですので、覚えておいていただければ、おもしろいと思います。時間が参りました。

私は、スタートのときに申し上げましたけれども、学者でもありません。ですから、「公務員たるもの」というようなお話はできないと申し上げましたけれども、自分自身が理事者として考えていることをお話した次第でございます。考え方には非常にさまざまございます。私の話の中から一つでも二つでも、参考になることがあればうれしいなと思っております。皆さん方は4月に配属されたばかりであり、行政マンとなって、自分の思っていたものとちょっと違うなと思う人もあるだろうし、「えっ、こんなところに配属されて」と思っている方もおいでになると思う。けれども、与えられた分野の仕事の中でしっかりと務めていただくことがまた次の、皆さんの将来につながると思っております。まずは挨拶を気持ちよくしてもらって、人間関係を築いていただいて、そして、それぞれの市町村が地域住民の皆さんのため、地域のためにますます発展されることを心から祈念しまして、私の話とさせていただきます。ご清聴、大変にありがとうございました。